

中国の小豆産地「林甸県」について

村崎 史郎

はじめに

去る平成25年7月下旬に、東京大学社会科学研究所田嶋俊雄教授の中国雑豆現地調査に同行させていただき、小豆産地である黒竜江省大慶市林甸県を訪問しました。当地での小豆栽培は、本格化して7~8年と伺いましたので、その概要を紹介します。

林甸県について

林甸県は、油田で有名な大慶市を構成する5つの県、自治区の一つで、中国東北部の黒竜江省南西部にあり、ハルビン市の西北、チチハル市の約80km東方に位置する、農業の盛んなところ です。また、日本で美人の湯と称されることの多いアルカリ性泉質の温泉があり、地熱が豊富とのことで、「中国温泉之郷」を謳い、観光、産業振興に努めていると伺いました。

自然条件をみると、北緯47度、年平均気温2.4℃（訪問時は30℃以上でしたが、冬は零下30℃ぐらいまで下がる）。無霜期間は120日前後、面積3,503平方km、標高

142~172mの東北平原の北部にある全く平坦な地形の場所です。また、年間降水量は420mm、耕地面積は15万haで、農耕地の土壌はアルカリ性の黒土です。よりアルカリ性が強い土地は、草地、あるいは耕作できない荒れ地や湿地となっています。

県の人口は27万人で、耕地面積は15万ha、主要作物はトウモロコシですが、7~8年前から緑豆、小豆の栽培が盛んになったとのこと です。また、降水量は少ないものの河川水が豊富なことから、10年ほど前から圃場整備をすすめ水稻栽培も広がり始めているそうです。水稻はトウモロコシよりも収益性が良いようでした。

林甸県農家の平均耕地面積は100ムー（6.6ha：ただし人によって言う数字が違い



30ムーとか130ムーとも聞いた) と、中国の平均耕地面積0.7haと比べると約10倍の耕作面積です。従って、機械化体系での大規模作物栽培とのことでした。

雑豆栽培の概況

林甸県では、以前は大豆を生産していたようですが、穫れなくなったとのことで、近年、小豆、緑豆、インゲン豆を栽培しています。ただ、農家にとって、一番収益性の良い作物はトウモロコシであるため、雑豆は若干条件の悪い圃場で生産されているようです。

林甸県全体では、小豆の栽培面積は14万ムー (9,300ha)、単収は230斤/ムー (172kg/10a) で生産量は約1万6千トン、主な品種は、宝清紅、天津紅、紅珍珠、また、緑豆の栽培面積は6万ムー (4,000ha)、単収は200斤/ムー (150kg/10a) で生産量は約6千トン、主な品種は、嫩緑1号、緑豊2号、緑豊5号だと同じでした。作期は、5月末に播種して、収穫は8月末とのことでした。

林甸県の圃場は、帯状に細長く、例えば、20~30畝ぐらいの幅で長さが1kmもありました。小豆や緑豆は、トウモロコシとトウモロコシの間 (幅20mぐらい) に植えられていました。作付規模は1haから4haぐらいでした。

土壌は、全体にpHが7.5から8.5ぐらいのアルカリ性の黒土であり、見たところ粘土質に見えましたが、踏むと崩れるので、それほど固くないようでした。年間降水量が



林甸県小豆圃場、左右はトウモロコシ



小豆の黄色い花

400mmぐらいなのと、夏季は日が長く気温も上がり、病害虫が少ないため雑豆の栽培適地とのことでした。ただ、水はけの悪い土とのこと、訪問前に数日間、雨が降ったとのこと、平坦な地形だけに、畑の低いところでは雨水が溜まっていた。

また、生産された小豆は、卸売市場を通じて、天津などへと販売されているそうです。

卸売市場

林甸県城の北に隣接する瓦盆窑に、雑豆の卸売市場があり、2社を訪問しました。7月と子実が少ない時であり、卸売市場は

全体に閑散とした雰囲気でしたが、遠く山東省からもトラックが来て豆を積み込んでいました。この卸売市場は、道路の両側に産地卸業者が並ぶ、自然発生的に成立した市場で、近隣の地域での生産物も集積し、年間取扱量は雑豆、雑穀で30万トンを超えているそうです。ただ、中国東北部の主要な卸の集散地である吉林省洮南市（林甸県の南西約260km）の卸売市場に比べると規模はるかに小さく発展途上であろうと見受けました。

訪問した一つは、賈老五糧食合作社で年商1万トン規模、小豆を選別調整していた合作社で、中国国内を主に商いしているとのことで、日本へも出したいとの意欲を示されました。簡単な選別機で、粒の大きなものと小さなものに分け、手作業で袋詰めしていました。

二つは、卸会社で、色彩選別機を設置した選別調整機がありましたが、動いておらず、実態は不明でしたが、相当、自慢のよ



袋詰めされた小豆

うでした。

その他

(1) 林甸県ではトウモロコシが主作物ですが、中国の食生活の変化に応じ野菜の作付を奨励しており、県がキャベツ、なす、ピーマン、唐辛子等の野菜品種の農民への展示圃場を設置していました。また、同じく、トウモロコシ、小豆、大豆、緑豆などの豆類、高粱等の試験を行う圃場も併設されていました。

(2) ハルビン市にある黒竜江省農業科学院を訪問し、雑豆の育種家（インゲン豆がご専門と伺う）にお会いしました。当地の農家は、種子を自家採取して用いるか、市場で購入した豆の内から良い豆を選んで種子に使うといった栽培なので、折角、新品種を育成しても10年ほどで品種の劣化が生じてしまう現実があると伺いました。卸、小売、輸出業者も含め、大きさや色だけで評価しており、品種への関心が低いことが原因で、結果として農家は品種へのこだわりがないと思われました。

(3) 林甸県で、緑豆を主に扱い、アメリカ、台湾へ年3,000トンぐらい輸出している卸売業者「慶豊糧油貿易有限公司」を訪問したところ、輸出専用、緑豆1品種に限定した取組をしていました。具体的には、約200の農家と契約栽培をし、種子業者から購入した特定品種の種子を、契約農家に提供して、栽培してもらい購入しているそうです。なお、収穫物が配付した品種かどうかは色で区別がつくので、農家も変なも

のは持ってこないとのことでした。また、この契約栽培では、この地域で一番高い価格、緑豆1斤（500g）4元（1元は16.3円7月時点）で購入しているそうです。輸出入以外は、近在の農家が持ち込む緑豆等を購入して、選別調整して国内向けに出荷しているそうです。ただ、トウモロコシの値段が高く、農家がなかなか緑豆を作ってくれないとこぼしていました。



輸出用の緑豆

終わりに

黒竜江省産の小豆では、ハルビン東方の三江平原の宝清県産が大変有名ですが、今回の調査の中で伺ったところ、宝清県では国有農場も含め小豆の生産面積が減少しつつあるそうです。雑豆は土地条件の比較的悪い農地で栽培されるものの、トウモロコシ生産が政策支援もあって農家の増産意欲も高いために、農家段階で競合が生じて栽培が減っているようです。

今回の調査では、林甸県の鹿保鑫副県長、呂徳軍科技局長他の多くの方々のご厚意に与りました。厚くお礼申し上げます。

また同行を許された東京大学田嶋俊雄教授、矢坂雅充准教授、張馨元研究員、李海訓及び西果林大学院生、明治大学の暁剛大学院生、天津市社会科学院の劉鳳華研究員で編成された調査団員各位に改めて感謝とお礼を申し上げます。